パスカルの《アポロジー》のプラン復元に関して（XLⅣ）

Sur le plan de l'《Apologie》de Pascal（XLⅣ）

竹　下　春　日

〔ＸＸⅣ〕　23　流転性 ── 146、152、206.

(1)　La.146-Br.372について。──《自分の思想を書きとめようとすると時としてそれが自分から逃れて行ってしまうことがある。このことはわたしに、自分の弱さを思い起こさせるよすがになる。わたしは、それをいつも忘れているのだ。このことは、忘れ去った思想に劣らず、わたしにとって益になる。わたしは、ただ自分のつまらなさを知ることだけがねがいだからである。》(En écrivant ma pensée, elle m'échappe quelquefois, mais cela me fait souvenir de ma faiblesse, que j'oublie à toute heure; ce qui m'instruit autant que ma pensée oubliée, car je ne tiens qu'à connaître mon néant.)

この断章にあっては、《自分の思想》(ma pensée) が《逃れて行ってしまう》(elle〔ma pensée〕m'échappe) ことに就いて述べてをり、また《忘れ去った思想》(ma pensée oubliée) なる語も見出される。而してこの時の流れに即した《自分の弱さ》(ma faiblesse) と《自分のつまらなさ》(mon néant) が、実感をもって語られている。すなわちこの断章の主旨には、諸行無常的思想に通ずるものがある。従ってこのfr.は、「23流転性」の項目に相応しいものと、言いうる。

(2)　La.15-Br.212について。──《流転 ── 自分の所有するすべてのものが流れ去って行くと感じるのは、なんとおそろしいことであろうか。》(Ecoulement. ── C'est une chose horrible de sentir s'écouler tout ce

qu'on posède.)

このfr.中には、文頭に《流転》(Ecoulement) とうタイトルが附せられているので、当然23の「流転性」のうちに入る。

(3) La.206-Br.122について。── 《時は苦痛をいやし、ほとぼりをさます。つまりは、人が変るからである。もう同じ人間ではなくなるのである。侮辱した人も、侮辱された人も、もう今までの自分ではない。以前、喧嘩をしかけた国民と、それから二世代経ってふたたび相見えるようなものである。相変わらずフランス人であることにかわりはなくとも、同じフランス人ではない。》(Le temps quérit les douleurs et les querelles, parce qu'on change : on n'est plus la même personne. Ni l'offensant, ni l'offensé, ne sont plus eux-mêmes. C'est comme un peuple qu'on a irrité, et qu'on reverrait après deux générations. Ce sont encore les Français, mais non les mêmes.)

この断章が、23の「流転性」のうちに分類しうることは、冒頭の《時は苦痛をいやし、ほとぼりをさます。つまりは、人が変るからである。……》(Le temps quérit le douleur et les querelles, parce qu'on change:……) という叙述に徴して、明らかである。

〔ＸＸＶ〕　24　不信仰者に対する批判と教導 ── 11 (35)、12、15、17、343、346、349、350、351 (60)、417 (48)、454 (27)、462 (27・34・41・62)、463 (3)、464、465、466 (33)、471、514 (33・37).

(1) La.11(35)-Br.194について。── この長断章中には、次の二個の叙述が見出される ── 《しかしながら、神を知ることもなく、求めることもなしに生きている連中は、自らわが身をかえりみる値打のない者と思いなしているのであるから、他の人々からもかまってもらう値打はない。だから、そうした連中を軽んじまい、したい放題の愚行に勝手に溺れさせておいてやるま

いとするなら、かれらの軽んじている当の宗教の宗教的愛のすべてを傾けつくさねばならないことになろう。》(Mais pour ceux qui vivent sans le〔Dieu〕connaître et sans le chercher, ils se jugent eux-mêmes si peu dignes de leur soin, qu'ils ne sont pas dignes du soin des autres et qu'il faut avoir toute la charité de la religion qu'ils méprisent pour ne les pas mépriser jusqu'à les abandonner dans leur folie.)；《……そして、かれらが自分の身をみじめに思い、せめても光が見出せないものかと、いくらかでも歩み出すことができるように、したしくみちびいてやらねばならない。》(il faut faire ……et les appeler à avoir pitié d'eux-mêmes, et à faire au moins quelques pas pour tenter s'ils ne trouveront pas de lumieres.)

これら二個の引用文のうち、前者中の《そうした連中を軽んじまい……》(pour ne les pas mépriser……) には、「常識上は軽んずべき者」という意味が、言外に前提されている。而して後者における《かれらが自分自身をみじめと思い》(avoir pitié d'eux-mêmes) も、第三者から見ても当然不信者は「みじめである」という判断を前提しているので、われわれは両引用文には、不信者への批判が含まれていると、見做すことが出来る。そうしてかような不信仰の徒に対しては、宗教的立場からする「導き」が必要であるとする旨が、明瞭に看取されるので、この断章は、24の「不信仰者に対する批判と教導」のうちに、入れるのが当然であると、言えよう。

(2) La.12-Br.195について。—《何一つ知らないのに、こんなふうに安心していられるとは、何とも奇怪なことである。だから、こうした生活を送っている連中に対しては、無茶苦茶ぶりと馬鹿さ加減とを目の前につきつけて、思い知らせてやらねばならない。われながら、この愚かさを目にしてあきれるまでにしてやらねばならない。》(Ce repos dans cette ignorance est une chose monstrueuse, et dont il faut faire sentir l'extravagance et la stupidité à ceux qui y passent leur vie, en la leur représentant à eux-mêmes, pour les confondre par la vue de leur folie.)

この断章は、その冒頭において、《何一つ知らないのに、こんなふうに安心していられるとは、何とも奇怪なことである。……》(Ce repos dans cette ignorance est une chose monstrueuse,……) として、無知に安住している《奇怪な》連中に対する批判であり、《……してやらねばならない》(il faut faire……) は、これらの人々に対する教導の必要にかんするものである。それ故、このfr.は「24 不信仰者に対する批判と教導」の項目中に属すべきものである。

(3) La.15-Br.194 terについて。── この断章は、形式上多くの断章を含んでおり、相互に分離しているが、内容的には、不信仰者への宗教的立場からする批判・解説（実存論的分析を含む）であって、相互に関係を有している。批判的叙述としては、次のものを挙げることが出来る ── 《これらの両者は、どちらも同情に値する。けれども、一方の者には、いたわりの気持から出た同情を抱くべきだとしたら、もう一方の者に対しては、さげすみの気持から出た同情を抱くべきであろう。》(On doit avoir pitié des uns et des autres ; mais on doit avoir pour les uns une pitié qui naît de tendresse, et, pour les autres, une pitié qui naît de mépris.)

この断章中には、三個の立場が示されている。即ち、《一方の者》(les uns) と《もう一方の者》(les autres)、及び第三者の三つの立場（パスカルの立場）である。そうして二種類の《同情》── 一方は、肯定的内容をもつ批判（いたわりの気持ちから出た同情）であり、他方は否定的内容をもつ批判（さげすみの気持ちから出た同情）── が、述べられている。これらの批判が、倫理的批判（パスカルの立場からする）とも言うべきものであることは、言う迄もない。

次に、「教導」を志向する断章内容を、われわれはこの長断章（La.15）中に見出しうる ── 《かれらを軽んじまいと思うならば、かれらの方が軽んじている宗教にでも入らねばならないであろう。》(Il faut bien être dans la religion qu'ils méprisent pour ne les pas mépriser.)

この叙述が分類上、「教導」の部類に入ることは、《宗教》(la religion)、即ちキリスト教への導入を妥当として居ることからも、明らかである。

（つづく）